

研究主題

未来を拓く国語教育の創造

—評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり—

言語部 研究主題

言葉のよさに気付き、親しみ、日常生活に生かす単元づくりと評価

第6学年国語科学習指導案

単元名

「クルルとカララの関係を考え、まとめよう」

—「人物同士の関係を考えよう(仮)」—

学習材名「風切るつばさ」(東京書籍 6年)

日時：令和4年12月19日(月) 5校時

児童：板橋区立板橋第十小学校 第6学年1組 40名

指導者：板橋区立板橋第十小学校 主任教諭 伊藤 あゆ美

1 単元の目標

- (1) 語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすることができる。
〔知識及び技能〕(1)オ
- (2) 「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。
「学びに向かう力、人間性等」

2 単元の評価規準

	ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	①語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。((1)オ)	①「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。(C(1)エ)	①進んで物語の全体像について描写を基に捉え、学習課題に沿って読み取ったことを表現しようとしている。

3 単元構想

- (1) 児童について(児童観)

本学級は、日頃から読書に励む児童が多い。読むことの学習では、想像しながら読むことを楽しみ、進んで友達と考えを交流することで新たな気付きを得ている。一方、自分の考えを文章に表現することは苦手とする児童が多い。

「サボテンの花」では、物語を読んで思ったことや考えたことを明確にし、聞き手に伝わるよう工夫して朗読する学習をした。登場人物の思いが会話文に表現されていることに着目し、朗読の表現を工夫する

児童が多くいた。「海のいのち」では、登場人物の生き方から中心人物への影響について考え、特に山場の場面において、中心人物の心情の変化を捉える学習をした。

本単元を行うにあたり、国語科の学習や言葉に関する意識調査を行った。結果は以下のとおりである。

(令和4年11月8日実施 40名)

質問	児童の回答	人数 (割合※小数第1位四捨五入)
①国語科の学習は好きですか。 (選択式)	<ul style="list-style-type: none"> ・好き ・どちらかといえば好き ・どちらかといえば好きではない ・好きではない 	<ul style="list-style-type: none"> 11名 (28%) 19名 (48%) 7名 (17%) 3名 (7%)
②国語科の学習は得意ですか。 (選択式)	<ul style="list-style-type: none"> ・得意 ・どちらかと言えば得意 ・どちらかと言えば得意ではない ・得意ではない 	<ul style="list-style-type: none"> 7名 (17%) 13名 (33%) 15名 (38%) 5名 (12%)
③国語科では、どの学習が好きですか。 (選択式・複数回答)	<ul style="list-style-type: none"> ・物語文を読む学習 ・説明文を読む学習 ・スピーチ、話し合い、発表などの話すこと・聞くことの学習 ・文章を書く学習 ・短歌や俳句、詩などを書く学習 ・音読・朗読の学習 ・言葉についての学習 ・漢字についての学習 ・書写 	<ul style="list-style-type: none"> 19名 (48%) 10名 (25%) 10名 (25%) 12名 (30%) 9名 (23%) 7名 (18%) 11名 (28%) 19名 (48%) 11名 (28%)
④物語を読むときに意識していることは何ですか。 (記述式・複数回答)	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の心情 ・登場人物の会話 ・山場 ・作者の考え、伝えたいこと ・大事なところ、要点 ・登場人物の行動 ・中心人物は誰か ・対人物の影響、関係 ・心情の変化 ・正しく、すらすら読む ・中心人物の変化 ・登場人物の状況 ・言葉の意味 ・間を開けて読む、ゆっくり読む ・大きな声で読む ・覚えるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> 18名 (45%) 3名 (8%) 3名 (8%) 3名 (8%) 3名 (8%) 2名 (5%) 2名 (5%) 2名 (5%) 2名 (5%) 2名 (5%) 1名 (3%) 1名 (3%) 1名 (3%) 1名 (3%) 1名 (3%) 1名 (3%)
⑤登場人物の気持ちはどんなところから分かりますか。 (記述式・複数回答)	<ul style="list-style-type: none"> ・会話文 ・山場 ・心情表現 ・行動 ・表現 ・文章 ・表情 ・言葉 	<ul style="list-style-type: none"> 19名 (48%) 7名 (18%) 6名 (15%) 3名 (8%) 3名 (8%) 3名 (8%) 3名 (8%) 3名 (8%) 1名 (3%)

国語科の学習に対して、70%を超える児童が「好き・どちらかといえば好き」と回答していることから、国語科の学習を肯定的に捉えている児童が多いと分かる。その一方で、国語科の学習を「得意・どちらかといえば得意」と回答した児童は約50%にとどまり、肯定的な思いの反面、国語科の学習に対して自信の無さを感じていることが考えられる。

物語を読むときに意識していることとしては、登場人物の心情が最も多く約45%だった。その他には、会話や山場、作者の考え、伝えたいことなどが挙げられたが、どれも回答数は少ない。対人物の影響、関係と答えた児童は2名しかいなかった。登場人物の気持ちがどんなところから分かるかについては、会話文が最も多く約48%、次いで山場が約18%であった。登場人物の心情や要となる場面に着目することはできる

が、言葉や様々な表現については十分に着目できていないことが考えられる。

以上のような実態から、表現や人物の相互関係に着目して読むことで、中心人物の心情や心情の変化を捉える力を伸ばしたり、読みの視点を広げたりする学習を行いたいと考えた。

(2) 学習材について (学習材観)

①「風切るつばさ」

学習材「風切るつばさ」は、中心人物であるクルルの心情の変化を読み取りやすい物語である。

濡れ衣を着せられ仲間から孤立してしまうアネハヅルのクルルと、何もできずその他大勢の仲間と行動を共にするカララ。上手く行動できない自分への嫌悪感から心を閉ざし飛ぶことさえできなくなってしまったクルルにじっと寄り添うカララ。カララが寄り添ってくれたことにより、次第に心がほぐれ再び飛べるようになったクルル。二羽のアネハヅルを中心に、仲間や友達との関わりや自信の喪失と再生について書かれた物語である。友達との関係が複雑化してきたり理想の自分と現実の自分の違いに気が始めたりする6年生の児童にとって身近な内容であり、自分の経験と結び付けて読むことができる児童もいるのではないかと考える。

中心人物クルルの心情が分かる表現が多くあり、クルルに寄り添って読むことができる。会話や行動、心情表現などの直接的な表現だけでなく、慣用表現や比喻表現などの暗示的な表現も用いられており、文章中の様々な表現と心情を結び付けることで、クルルの心情やその変化を捉えることができる。また、クルルの心情の変化には、カララや仲間の存在が大きく関わっている。クルルとカララの関係や仲間との関係の変化を捉えることで、クルルとカララの人物像やクルルの変化とその原因といった物語の全体像をより具体的に想像することもできる。「つばさの音」についての対比された表現や「～すら」「～でさえ」等の副助詞の役割などに注目し、表現の効果について考えることもできる学習材である。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』には、「読むこと」における構造と内容の把握（文学的な文章）の指導事項として、下のように示されている。指導事項と心情を表す表現を照らし合わせると、①は低学年、②は中学年で学習した既習事項である。高学年では①②に加え③～⑥に着目して読むことができるようにしていく。

『小学校学習指導要領解説国語編』 C(1)イ構造と内容の把握 (文学的な文章)指導事項	物語を読む際に活用する心情を表す表現
第1学年及び第2学年 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。	①登場人物の言動（会話・行動）
第3学年及び第4学年 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。	②心情表現（くやしい・いやだ 等）
第5学年及び第6学年 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。	③比喻表現（まるで仲間殺しの犯人のように 等）
	④慣用語（後悔がうず巻く・きびしい言葉をぶつけてくる 等）
	⑤対比（つばさの音がみっともない雑音に聞こえる・つばさの音がこちよリズムで体いっぱいひびきわたった 等）
	⑥情景描写（うず巻く風の中で、傷ついた群れは、無言の夜をおかえた 等）

本学習材では、会話、行動、心情表現などの心情を表す直接的な表現だけでなく、比喻表現、慣用語、対比などの暗示的な表現も多く使用されている。

そこで、児童が心情を捉える際に着目させたい表現を以下のように整理した。

場面	段落	場面	着目させたい言葉・表現
1	①～⑥	犯人にされたクルル	<ul style="list-style-type: none"> ・モンゴルの草原の、うず巻く風の中で、傷ついた群れは、無言の夜をおかえた。(⑥情景描写) ・だれの心の中にも後悔がうず巻いていた。(④慣用語) ・あのとき、もっと早くにげていれば……。あのとき、すぐキツネに気づいてい

			<p>れば……。 (繰り返し)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・堂々めぐり ・くやしきだけがつのっていく。(副助詞) ・思いのはけ口など、どこにもない。(副助詞) ・いかりの持っていき場が見つかったとばかりに (副助詞+格助詞) ・きびしい言葉をぶつけてくる。(④慣用語) ・言い訳などおしつぶされそうな雰囲気に、クルルはだまるしかなかった。(副助詞・係助詞)
2	⑦～⑨	孤立し、自分を責めるクルル	<ul style="list-style-type: none"> ・まるで仲間殺しの犯人のように (③比喻表現) ・だれ一人かれの味方はいない。カララでさえ、(副助詞) ・今まであたりまえだったもの全てが一変した。 ・かれに背を向け、口をきくものさえだれもない。(副助詞) ・クルルの気持ちなど、だれ一人分かってとしないのだ。(副助詞) ・友達も仲間も何もかも信じられない。 ・たった一羽でいるしかなかったみじめな自分。(副助詞・体言止め) ・風の中を飛ぶ、自分のつばさの音すら、みともない雑音に聞こえる。 (⑤対比・副助詞) ・自分がくやしい。こんな自分がいやだ。自分の顔、自分のあし、自分のつばさ、みんないやだ。(②心情表現・繰り返し)
3	⑩～⑬	飛べなくなったクルル	<ul style="list-style-type: none"> ・いつものようにはばたいているのに、体がまい上がらないのだ。 ・草原の片すみうずくまるしかなかった。(副助詞) ・冬を前にして飛べなくなったツルは、死ぬしかない。(副助詞) ・そんなこと、どうでもよくなっていた。 ・ただじっとうずくまっていることだけが、おしつぶされそうな最後のプライドを保つゆいいつの方法に思えた。(副詞・副助詞)
4	⑭～⑰	心が解けていくクルル	<ul style="list-style-type: none"> ・白い雪がちらほらとまい始めたときだ。 ・もしカララが「さあ、いっしょに行こう!」と言ったら、たとえ飛べたとしても首を横にふるつもりだった。「おれなんかいらないだろう」とも言うつもりだった。 ・カララは何も言わなかった。ただじっととなりについて、南にわたっていく群れをいっしょに見つめていた。(副詞) ・こいつ覚ごしてるんだ。 ・心が少しずつ解けていく気がした。(④慣用語) ・そうか、おれが飛ばないとこいつも……。 ・カララをつき飛ばすようにはばたいた。(③比喻表現) ・「あっ……。」
5	⑱～㉓	飛べるようになったクルル	<ul style="list-style-type: none"> ・クルルの体も空にまい上がっていた。 ・クルルは思わずさげんだ。 ・かっぱいはばたくと、風の中を体がぐんぐんとのぼっていく。 ・風を切るつばさの音が、こちよいリズムで体いっぱいひびきわたった。 (⑤対比) ・カララがふり向いて、「いっしょに行ってくれるかい?」と言った。「もちろんさ。」クルルも少し照れて笑って見せた。 ・最後の群れを追うように (推測) ・どこまでもどこまでも……。 (繰り返し)

②全文シート

物語の全文と段落番号が書かれているシートを活用し、心情を表す表現に着目したり物語全体を俯瞰して見たりすることができるようにした。全文が一度に目に入るシートにし、心情が分かる表現を見つけた場面ごとの人物相関図を描きこんだりしながら読んでいくことで、人物の相互関係が中心人物の心情の変化に影響していることに気づきやすくなると考えた。また、段落番号を付けることで、話合いの際にどの叙述を根拠にしているのかを共通理解しやすくなった。

③人物関係カード

全文シートに描いた人物相関図を基にしながら人物の相互関係や心情の変化について話し合う際、人物関係カードを用いて話し合うことができるようにした。カードはクルル・カララ・群れを表す計3枚で、両面で色が異なる。始めは3枚とも同じ色になるよう置くことで、三者の立場が一致していることを表現する。行動や言葉をきっかけに立場が変わったと捉えたときには、その人物の色を変えることで人物同士の思いが異なるものであることを表現する。人物の相互関係の変化や心情の変化を人物関係カードの色や距離で表し、それを操作しながら話し合うことができるようにすることにより、中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく影響していることを強く意識して読むことができるのではないかと考えた。



(3) 単元について（単元観）

本単元では、心情を表す表現や人物の相互関係に着目して読むことで、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする力を育むことを目指した単元である。登場人物の心情の変化を捉えるために様々な表現に着目することで表現の効果に気づき、表現の効果を意識して自分も使ってみようとする思いを高めたい。

本単元における「言葉のよさ」を、「①心情を表す様々な表現や人物の相互関係に着目して読むことにより、人物の心情の変化をより深く想像できること」「②登場人物の言葉や行動に着目して人物像を捉えることで、人物の心情の変化や行動の理由など、物語全体をより具体的に想像できること」の2点と考えた。学習を通してこれらの「言葉のよさ」を児童が実感できるようにしていきたい。

学習材「風切るつばさ」には中心人物であるクルルの自信の喪失と再生が書かれている。初発の感想では、「クルルが一人ぼっちになって、つらい気持ちがよく分かった」「クルルが飛ぶまで寄り添ったカララは優しい」「仲間の前でクルルを助けられなかったカララの申し訳ない気持ちが分かる」など、クルルとカララの関係性に触れるものが出てくると予想される。それらを基に、単元の学習課題「クルルにとってカララはどんな存在か（仮）」を設定し、友達と話し合いながら物語を読み、グループで学習課題を解決していこうという見通しをもつ。また、「クルルはなぜ飛べなくなったのか」「クルルはどうして飛べるようになったのか」「カララはなぜ戻ってきたのか」「飛べたときの心情はどうか」などの疑問をもつことも予想される。そこで、「クルルはなぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか（仮）」という読みの課題を設定する。

その後、単元の学習課題や読みの課題を解決するために言葉に着目し表現の効果も考えながら中心人物であるクルルの心情やその変化を読み取っていく。その際、人物の相互関係の変化や人物像についても捉えられるようにしていく。クルルだけでなく、カララの行動や心情などカララの側からも考えていくことにより、物語の全体像をより具体的に想像することを目指す。話し合いでは、どの言葉に着目してそう読んだのかというように考えの根拠となる叙述を共有することを大切にする。その中で、副助詞や慣用語、比喩や対比などの表現からも心情が捉えられることや、それらを用いる効果についても考えていく。

単元の終末では、グループごとに単元の学習課題についての答えをまとめ、ワールドカフェ形式で交流する。心情の変化や人物の相互関係、人物像などを総合し、クルルにとってのカララの存在の大きさや価値を考えることで、物語における対人物の役割にも目を向けることができるようにする。

単元終了後は、読むことの学習の中で「登場人物の心情を捉える際に様々な表現や人物の相互関係に着目して読んでいる姿」「表現の工夫や効果に気付いて読んでいる姿」が現れることを期待する。また、日常生活において「表現に関心をもって語彙を増やしたり、表現を工夫して話したり書いたりしようとする姿」も期待したい。

4 研究主題に迫るために

(1) 本単元で深めていこうとしている学びの質について

言語部が考える言葉の学習で深めたい学びの質は「言葉への気づきが高まること」である。学習を通して、それまで無意識だった言葉に着目（認識）し、言葉の意味や効果を知り、それらを意識して使うようになっていくことが、学びの質が深まることだと考える。単元終了後に、その単元での気づきを生かして生活の中で実際に言葉を使用したり、身の回りにある言葉を以前よりも意識するようになっていたりする姿を目指したい。

読むことの学習において深めたい学びの質は、「言葉や表現に着目し、その効果や言葉と言葉の関係を考えながら読み、内容をより具体的に想像すること、そして読みの視点（例：心情を捉えるとき、情景描写に着

目して読んでみようかな、人物の相互関係に着目して読もうかな)を増やすこと」である。文学的な文章においては、中心人物の心情の変化などを捉えるために言葉や表現に着目して読む中で、これまで無意識だった言葉に着目(認識)し、意味や役割、効果を考えていく。それらを意識し、語と語や表現と表現を結び付けて文章を読む(言葉による見方・考え方を働かせる)ことで、より具体的に物語の世界を捉えることができるようになっていくことが、学びの質が高まることだと考える。単元の学習終了後には、その学習で着目した言葉や読みの視点を意識して他の物語を読んでいく姿を目指したい。

本単元では、つばさの音に関する対比表現や「～すら」「～でさえ」などの副助詞に着目し、それらが表す心情や表現の効果などについて考えていく。対比表現からは中心人物クルルの心情の変化を、副助詞からは、クルルの孤立した状況や悔しさや孤独を捉えることができる。その言葉があることで、どのようなことが分かるか、その言葉が無かったり別の言葉に置き換えたりしたときとの違いも考えながら、言葉の意味や役割、効果を考える。単元の学習が進むに連れ、着目する言葉が増えたり、前時に考えた言葉の意味や役割、効果を意識して読んだりしている姿が、単元内における「言葉への気付きが高まった」姿であると考えられる。

また、より詳しく心情の変化を捉えるためには、変化の原因を考えながら読む必要がある。人物の相互関係や人物像にも注目し、それらと関連付けて心情の変化を捉えている姿が、「言葉に着目し効果や関係を考えながら読み、内容をより具体的に想像している/読みの視点を増やしている」姿であると考えられる。今後の物語を読む学習の際に、人物の相互関係や人物像に着目して読もうとしている姿が現れれば、学びの質が深まったと言えるだろう。

学びの質を深めるためには、「言葉に着目し、言葉への気付きを高めることのできる単元構造の工夫」と「言葉への気付きを自覚するための振り返り(自己評価)の充実」の二つが大切だと考えた

(2) 学びの質の向上を図る単元の工夫

①単元の目標と単元を通して身に付けさせたい力を設定した意図

ア 単元の目標

児童の実態と学習材の特徴を踏まえて、本単元では「心情を表す表現や人物の相互関係に着目して読むことで、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする力を育むこと」を目標に設定した。具体的には、以下の3点ができるようになることを目指している。

- 心情を表す様々な表現や人物の相互関係に着目して読むことにより、人物の心情の変化をより具体的に想像することができる。
- 言葉や行動に着目して人物像を捉えることで、人物の心情の変化や行動の理由など、物語全体をより具体的に想像することができる。
- 様々な表現に着目することで表現の効果に気付き、表現に着目して読んだり効果を意識して使ったりしようという思いを高める。

イ 単元を通して身に付けさせたい力

児童が文章を読む上で、表現に着目し、言葉への自覚を高めていけるようにするためには、文学的な文章の学習においても、「情報の扱い方に関する事項」に関わる内容を意識して指導していくことが必要である。文学的な文章における「情報」とは、叙述である。叙述を基に登場人物の心情の変化を捉えたり、表現の効果を考えたりすることで、言葉に着目して読む力を育てていくことができる。単元全体を通して、情報(叙述)と情報(心情)とを関連付けて考えることを大切にしていく。様々な叙述に着目し、そこから心情を捉えていくことで、より深く文学的な文章を読むことができるようになることを考えた。

本単元で身に付けさせたい知識・技能は、以下のとおりである。

	出会う		親しむ		生かす		
	第1・2時	第2・3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
学習活動	物語を読み、感想を基に学習課題を考え、学習の見通しをもつ。	登場人物の相互関係と中心人物の心情の変化を捉える。	副助詞や比喩、人物の相互関係に着目し、中心人物の心情や心情の変化を捉える。	副助詞や比喩、対比に着目し、中心人物の心情や心情の変化を捉える。	登場人物の相互関係や中心人物の心情の変化に着目し、中心人物にとっての対人物の存在について話し合う。		単元の学習を振り返り、表現の効果について考える。
知識技能	(1)言葉 オ語彙 語感や言葉の使い方	(1)言葉 オ語彙 語句と語句との関係 語句の構成 慣用語	類義語・対義語 等		(2)情報 ア情報と情報との関係 原因と結果 イ情報の整理 情報と情報との関係付けの仕方 図などによる語句と語句との関係の表し方		(1)言葉 オ語彙 語感や言葉の使い方

具体的には、次のような点を意識して指導する。

指導事項		具体的な内容
① 言葉の特徴や使い方に 関する事項	オ 語彙	○心情を表す様々な語句について、似た心情を表す言葉、反対の心情を表す言葉に気づき、関係付ける。 ＜語句と語句との関係＞【第2～5時】 ○人物像や人物の相互関係に着目し、それを適切な言葉や表現で表す。 ＜語彙を豊かにする＞【第6・7時】 ○心情を表す様々な表現があることやそれらに着目して読むことにより、人物の心情をより具体的に想像することができることを意識する。 ＜語彙を豊かにする＞【第8時】
	ア 情報と情報との関係	○出来事（原因）と中心人物の心情（結果）や人物の相互関係の変化（原因）と中心人物の心情の変化（結果）を捉える。 ＜原因と結果＞【第2～5時】
② 情報の扱い方に 関する事項	イ 情報の整理	○「表現と心情」「人物の相互関係の変化と心情の変化」「前半の心情と後半の心情」などを関係付ける。 ＜情報と情報との関係付けの仕方＞【第2～5時】 ○人物相関図に関係する語句を書き込み、関係を整理する。 ＜図などによる語句と語句との関係の表し方＞【第2～6時】 ○「親しむ」段階で読み取った物語の設定や人物の相互関係、心情の変化などから、対人物の心情を類推する。 ＜情報と情報との関係付けの仕方＞【第6・7時】

「読むこと」における思考力・判断力・表現力において身に付けさせたい力としては、以下の2点である。

○中心人物の心情の変化を捉える際に、心情を表す表現や人物の相互関係に着目して読む力。

○物語の全体像を捉える際に、複数の表現から人物像を想像したり物語の展開と関係付けたりして読む力。

「風切るつばさ」は、人物の相互関係や心情の変化を関係付けたり、人物像を捉えたりしやすい学習材である。本単元の学習を通してこれらの力を身に付けることで、物語を読むときは「○○に着目して読んでみよう」という読みの視点を獲得することができると考えた。今後の文学的な文章を読む学習や、読書生活に生かすことのできる力である。

豊かな語彙の拡充として、特に着目させたい語句は以下のとおりである。

ア 中心人物の心情を表す言葉

物語前半部分では、中心人物クルルの心情を表す言葉に着目できるようにする。「～すら」「～でさえ」等の副助詞が用いられていることで、中心人物の自信の喪失や孤独をより深く想像することができることに気付かせたい。また、「みじめ」「みっともない」等の言葉についても、その言葉があることで、どのようなことが分かるか、その言葉が無かったり別の言葉に置き換えたりしたときとの違いも考えながら言葉の意味や役割、効果を考えられるようにする。

イ 中心人物の心情の変化を表す表現

本学習材では、「つばさの音」についての対比された表現により、中心人物の心情の変化が表されている。物語の後半部分を前半部分と比較しながら読むことで対比表現に着目できるようにし、それが心情の変化を表していることに気付かせたい。また、「つばさ」という言葉が作品全体を通して何を表しているのかを話し合う場面を作ることで、「風切るつばさ」という題名に込められた意味についても考えていけるようにする。

②主体的、対話的で深い学びの視点での授業改善につながる工夫

単元全体を、以下の三つの段階で構成した。

- 1 学習内容への方向付けをしながら学習材と出合う段階 【出合う】
- 2 学習材を繰り返し読み、言葉に着目して考える段階 【親しむ】
- 3 言葉の意味や役割、効果を意識して読み、自分の考えをまとめる段階 【生かす】

【出合う】学習材の題名に着目して物語を読み、感想を基に学習課題を考え、学習計画を立てる。

学習材の題名に着目させ、「風切るつばさ」とはどのような物語なのかを考えることを通して、「風切る」「つばさ」という言葉への自身の捉えを明確にしてから読み進めていけるようにする。第1時で題名の言

葉に着目することで、「つばさ」という言葉の意味や役割を考えながら学習に取り組む児童も現れるだろう。単元終了時に改めて「つばさ」という言葉について考えることで、自身の言葉の捉え方の広がりや深まりに気付く姿も期待したい。その後、初発の感想を基に児童とやり取りをしながら学習活動、言語活動、読みの課題を設定し、学習計画を立てたり、単元名を付けたりする。ここでは、児童の初発の感想を大切に、児童が自ら解決したいという意欲をもって学びに向かえるようにする。

【親しむ】人物の相互関係や心情を表す表現に着目して中心人物の心情を想像し、心情の変化を捉える。

児童が叙述を基に人物の相互関係を捉えたり関係の変化から中心人物の心情やその変化を想像したりしながら物語の全体像を捉えていく。全文シートを使用し、着目した表現と読み取った心情、表現と表現とを関係付ける活動を行いながら単元の学習課題や読みの課題の追究をしていく。

第2・3時では、人物相関図を描くのは全員共通とし、中心人物の心情やその変化とその根拠となる表現を結び付けながら自分なりに中心人物の心情やその変化を捉え、全文シートの下段に書きまとめていく。

第4・5時の全体共有では、着目した表現の意味や効果を考えたり表現や人物の相互関係と心情の変化を関係付けたりしていく。中心人物の心情は、登場人物の会話や行動、「くやしい」「みじめ」「だまるしかない」といった直接的な表現だけでなく、比喻表現や慣用語、対比など間接的な表現からも捉えることができる。表現の効果を考える際には、その言葉が①無かったら（有無）②別の言葉だったら（言い換え）③思い出そう（経験の想起）④意味は何（辞書的意味）といった視点で考え、言葉の意味や役割、効果を感じることができるようにしていく。また、人物の相互関係の変化や心情の変化を人物関係カードの色や距離で表し、それを操作しながら話し合うことができるようにする。中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく関わっていることを強く意識させたい。

【生かす】単元の学習を振り返り、表現に着目して自分の考えをまとめる。

「生かす」段階では、これまでの読みを生かして単元の学習課題について考える。人物の相互関係や中心人物クルルにとっての対人物カララの存在をグループで話し合い、考えをまとめ、ワールドカフェ形式で他グループと考えを聞き合う。その中で、「親しむ」段階で着目した表現や人物の相互関係などが現れてくることを期待する。交流後に単元の学習課題に対する最終的な自分の考えを書きまとめるようにする。

第8時では、単元の学習を振り返り、表現に着目して登場人物の心情を読むことのよさや、物語での表現に対する自分の捉えの変容についてまとめる。表現の工夫や効果への意識を高め、言葉を使うことに自覚的になることを期待したい。

(3) 学習改善・授業改善につながる評価活動の工夫

①「児童にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を捉える評価の工夫

本単元で身に付けさせたい力を明確にし、どのような場面でどのような児童の姿として現れるかを想定する。次の「読むこと」の学習や日常生活における児童の姿を基に、それらが身に付いているのかを評価していく。本単元で想定する単元後の児童の姿は、以下の三つである。

ア：登場人物の心情を捉える際に様々な表現や人物の相互関係に着目して読んでいる。

イ：表現の工夫や効果に気付いて読んでいる。（～すら・～でさえ・言葉に込められた心情・対比）

ウ：表現に関心をもって語彙を増やしたり、表現を工夫して話したり書いたりしようとしている。

②教師が指導の改善を図るための評価の工夫

単元構造図を作成し、そこに本単元で求める児童の具体的な姿を示す。総括的評価（記録に残す評価）と形成的評価（指導に生かす評価）、評価方法について、あらかじめ明確にして評価計画を立てることで、学習改善・授業改善に役立つ。

1 単位時間ごとに評価の重点を設定するが、内容のまとまりの中で柔軟に評価していく。

	出会う		親しむ		生かす		
	第1・2時	第2・3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
総括的評価 (記録に残す 評価)				知・技		主体的	
			思・判・表		思・判・表		
形成的評価 (指導に生かす 評価)	知・技 思・判・表 主体的		知・技 主体的	主体的	知・技 主体的	知・技	知・技 主体的 (次単元)

総括的評価（記録に残す評価）だけでなく、形成的評価（指導に生かす評価）も単元構造図に明記し、児童の学習状況を把握する。座席型評価補助簿を用いて前時の目標に達成していない児童を把握し、次時の指導に役立て支援を充実させる。

③児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるための評価の工夫

児童が言葉への気付きを自覚するための振り返り（自己評価）の充実のために、全文シートと毎時間の振り返りを活用していく。

ア：全文シート

全文シートを用いて、人物の相互関係や中心人物の心情とその変化を捉えていく。個人で読んでいるときはもちろん、共有の後に、児童が気付きを付け足していくことができるようにする。個人で読んでいるときと友達との共有を経た後、単元の初めの方の時間と終わりに近付いている時間では、着目する言葉や、人物の相関図に書き込まれている内容が変化するだろう。色を変えて書き加えたり写真に撮って見返したりすることで、自己の変容を実感できるようにする。

イ：毎時間の振り返り

毎時間の授業の終わりに学習を振り返る時間を設定する。言葉への気付きや読みの視点の広がりや学び方の二つの観点で振り返り、記述で自己評価を行う。

○今日はどうのように学習をして／次はどうのように学習をするのか。 【学び方】

○何が分かった／何が分からなかった。

【言葉への気付き・読みの視点】

児童が、本時の学びを自覚するとともに、毎時間の振り返りを同時に見られるようにすることで、これまでに着目した表現や読みの積み重ねを認識し、自己の学びの変容を自覚できると考える。また毎時間の振り返りをスプレッドシートに入力し、互いに読み合うことができるようにすることで、友達の振り返りから新たな気付きを得ることもできると考えた。

5 単元計画

過程 (次)	時	学習活動	○指導上の留意点	◆評価規準 ★評価方法
出 合 う	1 ・ 2	物語を読み、感想を基に学習課題を考え、学習の見通しをもつ。 ① 題名「風切るつばさ」から、どのような物語か考える。 ② 「風切るつばさ」を読み、登場人物や展開など、物語の大まかな構成を確かめたり感じたことを出し合ったりして、単元の学習課題を設定する。 【単元の学習課題】 クルルにとってカララはどんな存在か（仮） ③ 初発の感想を書く。 (心に残ったこと・みんなで考えたいこと・気に入った表現)	○「風切る」や「つばさ」という言葉から自分が感じるイメージを明確にしておく。 ○「みんなで話し合いたいこと」を出し合い、単元の学習課題を作る。	

親しむ	2	<p>学習の見通しをもつ。登場人物の相互関係と中心人物の心情の変化を捉える。</p> <p>①感想を共有しながら読みの課題を考える。</p> <p>【読みの課題】 クルルは、なぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか。</p> <p>②学習計画を立て、単元名を付ける。</p> <p>③人物相関図を描き、カララや仲間との関係、それぞれの場面での心情や人物像を整理する。(関係・人物像・心情)</p>	<p>○初発の感想を整理し、読みの課題を作る。</p> <p>○やり取りしながら学習計画と単元名を考え、活動の見通しをもつことができるようにする。</p> <p>○全文シートを配布し、心情が分かると思った叙述にサイドラインを引いたり書き込みをしたり、ワークシートに書きまとめたりしながら読み進め、読みの課題に対する自分の考えをもつことができるようにする。</p> <p>○図示したり関連する言葉を書き込んだりしながら人物の相互関係をまとめることで、変化を捉えることができるようにする。</p> <p>○人物関係カードの色や距離を考え、操作しながら話し合うことで、中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく関わっていることに気付くことができるようにする。</p>	
	3	<p>登場人物の相互関係と中心人物の心情の変化を捉える。</p> <p>【読みの課題】 クルルは、なぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか。</p> <p>①人物相関図を描き、カララや仲間との関係、それぞれの場面での心情や人物像を整理する。(関係・人物像・心情)</p> <p>②どのような表現に着目して相関図をかいたのか、グループで共有する。</p> <p>③読みの課題に対する現段階での自分の考えを書く。</p>	<p>○図示したり関連する言葉を書き込んだりしながら人物の相互関係をまとめることで、変化を捉えることができるようにする。</p> <p>○人物関係カードの色や距離を考え、操作しながら話し合うことで、中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく関わっていることに気付くことができるようにする。</p>	
	4 (本時)	<p>中心人物の心情や心情の変化を捉える。(飛べなくなるまで)</p> <p>【読みの課題】 クルルは、なぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか。</p> <p>①クルルが飛べなくなるまでの出来事や周囲との関係の変化に着目し、クルルの心情や心情の変化を話し合う。</p> <p>②自分の考えをまとめる。</p>	<p>○心情を表す表現に着目して、中心人物の心情を具体的に想像させる。</p> <p>○副助詞や文末に着目し、意味や効果について考えることで、中心人物の心情について気付かせる。</p> <p>○人物関係カードの色や距離を考え、操作しながら話し合うことで、中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく関わっていることに気付くことができるようにする。</p>	<p>◆「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりしている。〔思考・判断・表現①〕</p> <p>★発言、全文シートや人物相関図、ワークシートの書き込み。 ・表現の効果に対する気付きの確認。</p>

	5	<p>中心人物の心情や心情の変化を捉える。(飛べなくなってから)</p> <p>【読みの課題】</p> <p><u>クルルは、なぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか。</u></p> <p>①クルルが飛べなくなってからの出来事や周囲との関係の変化に着目し、クルルの心情や心情の変化を話し合う。</p> <p>②読みの課題に対する自分の考えをまとめる。</p>	<p>○言葉の意味や効果から中心人物の心情を想像させる。</p> <p>○表現に着目して心情を読むことで、中心人物の心情の変化が分かることに気付かせる。</p> <p>○人物の相互関係の変化が中心人物の心情の変化に影響を与えていることに気付くことができるようにする。</p> <p>○人物関係カードの色や距離を考え、操作しながら話し合うことで、中心人物の心情の変化には人物の相互関係の変化が大きく関わっていることに気付くことができるようにする。</p>	<p>◆ 語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。〔知識・技能①〕</p> <p>★ 発言、全文シートや人物相関図、ワークシートの書き込み。</p> <p>・ 表現の効果や言葉の使い方に対する気付きの確認。</p>
生 か す	6	<p>人物の相互関係や中心人物にとっての対人物の存在について話し合う。</p> <p>【単元の学習課題】</p> <p><u>クルルにとってカララはどんな存在か(仮)</u></p> <p>①クルルとカララの関係について改めて考え、自分の考えをまとめる。</p> <p>②クルルにとってのカララの存在について、グループで話し合い、考えをまとめる。</p> <p>③ホワイトボードに人物相関図を作り、発表の準備をする。</p>	<p>○人物の相互関係を相関図に表したり人物像について考えたりすることで、中心人物の行動の理由と登場人物同士の関係や人物像を関係付けて考えることができるようにする。</p> <p>○人物関係カードを操作しながら考えを伝えることで、互いの考えを視覚的にも捉えやすくする。</p>	<p>◆ 「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりしている。〔思考・判断・表現①〕</p> <p>★ 発言、人物関係カードの操作、全文シートや人物相関図の書き込み、ワークシートの記述。</p> <p>・ 人物像や物語の全体像に対する気付きの確認。</p>
	7	<p>人物の相互関係や中心人物にとっての対人物の存在について話し合う。</p> <p>【単元の学習課題】</p> <p><u>クルルにとってカララはどんな存在か(仮)</u></p> <p>①ワールドカフェ形式でそれぞれのグループの考えを交流し合う。</p>	<p>○人物関係カードを操作しながら交流し合うことで、グループの考えを視覚的にも捉えやすくする。</p>	<p>◆ 進んで物語の全体像について描写を基に捉え、学習課題に沿って、読み取ったことを表現しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕</p> <p>★ 行動観察・ワークシート、振り返りの記述。</p>

	②「クルルにとってのカララの存在とは、どのようなものか」を意識して、学習課題に対する自分の考えをまとめる。	○他のグループの考えと自分の考えを比べながら聞き、自分の考えを確かにしたり広げたりすることができるようにする。	・クルルとカララの関係を自分なりに捉え、表現しようとしているかの確認。
8	単元の学習を振り返り、表現の効果について考える。 ①各自の学習課題についてのまとめを読み合う。 ②物語の中で心に残った表現やその効果を考える。 ③学習感想を書く。	○「つばさ」について考えたり表現について振り返ったりすることで、言葉や言葉の使い方を意識できるようにする。 ○単元の学習を通して、表現に着目して登場人物の心情を読むことや、表現に対する自分の捉え方の変容を振り返らせる。	
単元後	①登場人物の心情を捉える際に様々な表現や人物の相互関係に着目して読んでいる。 ②表現の工夫や効果に気付いて読んでいる。 ③表現に関心をもって語彙を増やしたり、表現を工夫して話したり書いたりしようとしている。		

6 本時の学習（第4時／全8時間）

（1）本時のねらい

心情が表れている表現や人物の相互関係に着目し、クルルの心情やその変化を捉えることができる。

（2）本時の展開

学 習 活 動	○指導上の留意点	◆評価規準 ★評価方法
1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確かめる。	○読みの課題「クルルは、なぜ飛べなくなり、なぜ飛べるようになったのか」の前半について考えることを確かめる。	
クルルは、なぜ飛ぶことができなくなったのだろうか		
2 クルルの心情や心情の変化を捉える。 （1）グループで考えや根拠となる叙述を出し合う。（グループ） （2）読み取ったクルルの心情とその根拠となる叙述を出し合う。（全体） （3）クルルが飛べなくなった理由を書きまとめる。（個人）	○人物関係カードを操作しながら話し合うよう促すことで、読みの視覚化を図る。 ○どの表現からそう考えたかを出し合うよう助言する。 ○言葉に着目し、意味や効果、役割を考える際には、その言葉の①有無②言い換え③経験の想起④辞書的な意味など、様々な観点から考え、多面的に捉えることができるようにする。 ○副助詞に着目し効果を考えることで「できえ」「しか」から分かる周囲との関係や孤立したクルルの心情を捉えさせる。 ○「みじめ」「みっともない」という言葉について考えることで、クルルの心情を具体的に想像させる。 ○「つばさの音すら」「みっともない雑音」といった言葉に着目して、どのような意味なのかを考えることで、クルルの心情をより具体的に想像させる。 ○新たに気付いた表現や捉えた心情を、全文シートや人物相関図に書き込んだり書き加えたりするように助言する。	◆「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりしている。 [思考・判断・表現①] ★発言、全文シートや人物相関図、ワークシートの書き込み。 ・表現の効果に対する気付きやクルルの心情の確認。 ○ <u>おおむね満足できる児童への次時以降の手立て</u> 表現の効果を考えながら、クルルの心情の変化を捉えるように助言する。 ○ <u>おおむね満足できる状況を目指す児童への次時以降の手立て</u> 場面の移り変わりや人物の相互関係の変化に着目し、クルルの心情を具体的に想像するように助言する。
3 本時の学習を振り返り、次時の見通しをもつ。	○工夫した表現から中心人物の心情を読むことができることを確かめる。	

7 資料

【児童とともに決めた単元名及び学習課題】

単元名：「クルルとカララの関係を考え、まとめよう」

学習課題：「クルルにとって、カララはどのような存在か考えよう。」

【本時（第4時）における評価規準】〔思考・判断・表現①〕

12/19 (月)

①クルルは、なぜ飛べなくなったのか考えよう。

カララでさえだま、ているところから、今までカララのために思、てや、ていたことなのに、クルルにとって特別な存在であ、るカララにうらざられてショックで飛べなくなっていた。

つばさの音すらか、ともない、雑音にきこえていて、三場面て生きろ、ことか、どうでもよくな、たとかい、ているから、今まで飛んでいた理由に自分の体も守る、という理由もあると思、たから、つばさの音すら雑音にきこえる、ということ、はクルルにとって、はじめて、か、い、た、か、た、(つら、か、た、)と思、う。

〈A評価〉

カララや仲間との関係の変化や副助詞、つばさの音の表現に着目し、クルルの心情の変化をより具体的に捉えている。

児童のワークシートより

- ・副助詞「さえ」を含む文から、カララの存在が特別であることを想像し、クルルの心情に大きく影響していることを捉えている。
- ・つばさの音から、クルルの傷つく心情を豊かに想像している。

〈B評価〉

カララや仲間との関係の変化や副助詞や心情を表す言葉に着目し、クルルの心情の変化を捉えている。

児童のワークシートより

- ・つばさの音には着目していないが、副助詞や対人物との関係からより具体的に心情を捉えている。

12/19 (月)

①クルルがなぜ飛べなくなったのか考えよう。

カララでさえも仲間にな、って、く、れ、ず、後、悔、し、た、り、自、分、を、ま、束、め、た、り、し、た、こ、と、で、ど、ん、ど、ん、フ、ラ、ク、な、り、そ、れ、が、自、分、の、体、に、も、影、響、を、し、飛、べ、な、く、な、っ、て、し、ま、っ、た。

(カララが仲間でなくな、って、し、ま、っ、た、こ、と、は、群、れ、が、仲、間、じ、や、な、く、な、っ、た、こ、と、よ、り、も、フ、ラ、ク、非、心、し、い、も、の、だ、っ、た、の、で、は、と、思、い、ま、し、た。)

12/19 (月)

①クルルはなぜ飛べなくなったのかを考えよう。

いろいろな事の積み重なりで1人に追いつか、れ、な、れ、て、い、た、言、い、返、せ、な、か、っ、た、こ、と、や、カララが群れに交、い、っ、た、こ、と、か、ら、クルルが1人、に、な、り、仲、間、が、い、な、く、な、っ、た、そ、れ、が、原、因、で、飛、べ、な、く、な、っ、た。

〈C評価〉

カララや仲間との関係の変化と関連付けてクルルの心情の変化を捉えているが、表現には着目していない。

児童のワークシートより

- ・出来事や群れとの関係は捉えているが、具体的な表現やカララとの関係に着目できていない。